東日本大震災から6年

カリタス釜石ボランティア体験記

中山博幸

あの3・11の混乱のさなかに生まれた赤ちゃんは、この4月に小学校に入学します。立派に6歳になって新1年生。あの日は金曜日で、学校は終業式の時期でした。震災から5年半の津波被災地の現状を知りたくて、昨年7月5日に岩手県釜石へ3回目のボランティアに出かけました。ボランティアに関心をお持ちの方への参考に体験を記してみます。

【東京→釜石　夜行バス】

釜石へ行くには東北新幹線で新花巻、そしてJR釜石線終点までのルートが速くて楽ですが、切符代は安くありません。今回池袋発夜11時・釜石着朝8時、片道9,200円の夜行バス気仙ライナーのリクライニングシートに横たわって、距離574kmを9時間かけて走破しました。途中、被災地の気仙沼・陸前高田・大船渡の海岸線を通過、釜石が近づくと仮設住宅が目にとまり、見覚えのある観音様そして鉄工所近くの釜石駅前で停車しました。土産のベルギーチョコが入ったバッグを手に市街地めがけて徒歩20分、立派なイオンモールが現れると商店街、ホテル、郵便局、病院そして真新しい復興住宅を抜けて懐かしいカリタス釜石に無事到着、待ってくれていたスタッフの笑顔にホット一息。

【カリタス釜石との出合い】

震災後間もなく釜石で被災者支援活動をしている吉田俊雄さんの紹介で、3年前初めてボランティアに参加しました。カリタス釜石は長期的な活動を視野に入れ2012年3月にNPOの法人格を取得し、釜石の支援活動センターの機能をはたすため、2年前に事務室、集会室、台所兼食堂、宿泊室を完備した施設をオープンし、常時ボランティアの受け入れと派遣、催事開催、支援団体のハブ的役割を担っています。スタッフ7人とボランティアが協力して被災者に寄り添いながら心のケア活動に努めています。

【仲間は高校生とシニアボランティア】

ボランティア活動は学びの場でもあります。今回の活動仲間は室蘭から海星学院高等学校ボランティアクループ6人、神戸から吉原さん、東京から吉田さんと私の元気シニアトリオ、それにスタッフが加わりチーム結成。年々ボランティア参加者が減少しているのが悩みですが、時間に余裕のあるシニアのリピーターの存在が大きいです。高校生や大学生が授業の一環としてボランティアに参加し、その体験を次世代に繋げていく姿に希望を感じます。1日の流れは6時起床ラジオ体操、7時朝食、9時ミーティング、9時20分活動開始、昼食をはさんで「お茶っ子」と「ふぃりあ」でのサロン活動、18時半夕のミーティング、19時夕食、22時就寝。若い高校生に触発され学生時代のキャンプを思い出し若返った気分です。

【仮設住宅でのお茶っ子サロンでの出会い】

お茶・お菓子一式とのぼりを持って仮設住宅の集会室へ。被災当初は多数の支援団体が仮設住宅を訪問しましたが、最近はほとんどが支援活動を終了しています。いつもカリタス釜石のお茶っ子サロンを楽しみにしている方が多くいます。集まった被災者の方と手芸や語り合いに興じ、震災体験談や釜石ならではの話や民謡を聞かせていただき、被災者の方々の心に触れた思いがしました。なかなか他人に話せなかった震災の辛い思い出をようやく語ることができるようになって、誰かに聞いてもらうことで心の落ちつきを取り戻します。定期的に顔を合わせて一緒に過ごすことで、お互いの絆を強め励ましあって張りを持って生活しています。カリタス釜石の隣のある教会1Ｆにオープンスペース「ふぃりあ」があり、ピンポンで体を動かしたり、囲碁・将棋や読書をしてめいめいが自由に過ごし、地域の人々が気軽に集まれる交流の場となっています。そのような皆さんと交流する中で、逆にボランティアのほうが元気をもらいます。

【仮設住宅と復興住宅】

仮設住宅に住んでいる方々は3,474人、そのうち高齢者は約31.1%です。復興公営住宅への入居が進むにつれ仮設住宅入居者が減り、ちらほら空き家も見られます。仮設住宅は平成29年度で終了予定ですので、引越しの目処が立たなかったり復興住宅の家賃負担に悩んだりと、復興から取り残され焦る気持を理解し、心のケアに当たることが大切になっています。復興住宅は、全体戸数の65%に当たる574戸が完成しました。集合住宅での生活経験がない方が初めて暮らす復興住宅

では、住民の方々のコミュニティー作り・孤立防止が緊急課題です。また地域住民とひとつになっていけるように、イベントや交流促進活動が必要になっています。

【釜石市と周辺地区の復興】

釜石市街の復興状況は道路や建物が建設され、ショッピングセンターがオープンしてにぎわいを取り戻していました。建物の壁面の高い位置に波高表示板があり、いかに巨大な津波が襲ったかが分かります。一方、周辺の鵜住居や大槌町は傷跡が生々しく残っています。更地に盛土工事が進行中で幹線道路が見えてきていますが、新しい街ができ住民が生活を始めるにはまだまだ年月がかかると思いました。

被災した釜石東中学校と鵜住居小学校が撤去された跡地に、2019年ラグビーワールドカップ会場建設工事が始まっていました。

【3・11の風化　被災者を忘れずに】

釜石の犠牲者1,145人のうち152人が、隣の大槌町は1,277人中423人が行方不明者です。被災地全体では、犠牲者18,455人中2,561人（13.9%）が行方不明者であり、今も捜索は続いています。残された家族にとっては、時間が止まったかのようです。児童・職員84名が津波の犠牲になった大川小学校訴訟では、遺族は二度と悲劇を繰り返さないために事実の徹底検証を訴えています。震災遺構が撤去され震災は目に見える形では遠のいていく中、被災者の心の傷は癒えていません。最近は被災地の現状についての報道が少なくなっています。私は、まだ支援活動やっているんですか、と聞かれて言葉に窮することがあり、震災が風化して人々が無関心になっていくことを危惧しています。今はまだ復興途上の最中であり、過去と現状を知る努力なしに震災の記憶と教訓は継承されません。今般ベルギーで被災地の現状を知ってもらうためチャリティーイベントを準備しています（プチポワ2月号12ページ参照）。大勢の方に来場いただき、資料やドキュメンタリーDVDなどで現状を学び、一人ひとりが今自分にできる支援について考えるきっかけとなることを期待しています。皆さんの中から、将来釜石を訪れる人が現れることを期待しながら、現地からの声をお届けして報告を終わります。

【釜石からのメッセージ】

遥か異国の地から、変わらずお心をお寄せくださっていることに、深い感謝と感動を覚えます。東日本大震災から5年半、《被災地》と呼ばれる地で活動してきましたが、あらためて振り返ると　向き合い続けてきたのは《人》であったと実感しています。さまざまな支援団体・支援者、行政に携わる職員の方々…。それぞれに寄り添い、それぞれをつなぎ、いのちの躍動を再び取り戻す。そのためのコーディネーターが私たちに課せられた役割だったのでは、と思います。今もこうしてベルギーの皆さまと、ここ釜石の人々を繋ぐことができるその喜びが、これからも活動を続けていく力となることでしょう。ありがとうございます。

特定非営利活動法人カリタス釜石
www.caritaskamaishi.com